第７章
助動詞

第１節　助動詞の概要

1. 助動詞とは

「**助動詞**」とは、「動詞」と共に機能し、その動詞に「補足的な意味を加える」という働きをする言葉のことです。

以下、英語学習初期に学ぶべき基本的な助動詞です。

(1)「will」…動詞に**「未来」**の意を加える。(「～するだろう」の意。)

(2)「can」…動詞に**「可能」**の意を加える。(「～することができる」の意。)

(3)「must」…動詞に**「必要・義務」**の意を加える。(「～しなくてはならない」の意。)

(4)「may」…動詞に**「五分五分の可能性」**の意を加える。(「～するかもしれない」の意。)

(5)「should」…動詞に**「正しさの主張・提案」**の意を加える。(「～すべきだ」の意。)

2. 助動詞を使った文の基本形

(1)「助動詞」を使った肯定文

「助動詞」を使って「肯定文」を作るには、**文頭に「主語」を置き、次に「助動詞」を置き、次に「動詞の原形」を置き、文の最後には「ピリオド（.)」を置きます**。「三単現」の条件が揃っている場合であっても、一般動詞は「原形」となります。また、「助動詞」の後ろには「一般動詞」だけでなく、「be 動詞」も置かれます（「be 動詞」の原形は「be」という形です)。

★　**基本形式：主語＋助動詞＋動詞の原形～．(助動詞の後ろには「動詞の原形」)**

例 1：She **can speak** Chinese.

「彼女は中国語を話すことができます。」

例 2：He **will be** in Nagano tomorrow.

「明日、彼は長野にいるだろう。」

(2)「助動詞」を使った疑問文と返答文

助動詞を使って「疑問文」を作るには、**文頭に「助動詞」を置き、次に「主語」を置き（つまり、肯定文における「主語」と「助動詞」の位置を入れ替え)、次に「動詞の原形」を置き、**

（※「世界につながる英文法」サンプル・Copyright： 株式会社デュープラー）

文の最後には「クエスチョンマーク（?）」を置きます。

また、「助動詞の疑問文」に返答する際は、**「Yes」または「No」の後ろに「カンマ（,）」を打ち、次に「答える人」から見た主語を「人称代名詞」に置き換えたもの（「I」「you」「he」「she」「it」「we」「they」のどれか）を置き、その後ろに「助動詞」を置きます。「No」の場合は、助動詞のさらに後ろに「not」を置きます。**

例：**Will** it rain tomorrow?「明日雨が降るでしょうか？」

→ Yes, it will.「はい、降ります。」／ No, it will not.「いいえ、降らないでしょう。」

(3)「助動詞」を使った否定文

助動詞を使って「否定文」を作るには、**文頭に「主語」を置き、次に「助動詞」を置き、次に「not」を置き（つまり、肯定文における助動詞の後ろに「not」を入れ）、次に「動詞の原形」を置き、文の最後には「ピリオド（.）」を置きます。**

例：It will **not** rain tomorrow.「明日、雨は降らないでしょう。」

3. 助動詞の短縮形

(1)「助動詞」と「not」の短縮形

- 「will not」→**「won't」**（短縮形の発音は [wóunt] となる。）
- 「cannot」→**「can't」**（他の助動詞と異なり、「can」だけは、短縮されない場合であっても「can not」のようにスペースを空けず、「cannot」のようにつなげるのが普通。）
- 「must not」→**「mustn't」**（短縮形の発音は [másnt] となる。）
- 「may not」→**「mayn't」**（短縮形は「英式」で稀に見られるが、ほとんど使われない。）
- 「should not」→**「shouldn't」**
- 「would not」→**「wouldn't」**
- 「could not」→**「couldn't」**
- 「shall not」→**「shan't」**（短縮形は「英式」で稀に見られるが、ほとんど使われない。）
- 「do not」→**「don't」**
- 「does not」→**「doesn't」**
- 「did not」→**「didn't」**

(2)「主語（名詞）」と「will」の短縮形、および「主語（名詞）」と「would」の短縮形

「will」は「'll」という形となり、また「would」は「'd」という形となり、どちらも前の「主語（または名詞）」との短縮形となります。

- 「I will」→**「I'll」**／「we will」→**「we'll」**／「you will」→**「you'll」**など
- 「I would」→**「I'd」**／「we would」→**「we'd」**／「you would」→**「you'd」**など

（※「世界につながる英文法」サンプル・Copyright： 株式会社デュープラー）

5. 助動詞の変換

「助動詞」の中には、「be 動詞か一般動詞を使った表現」に変換することができるものもあります。助動詞から変換された表現は、元の助動詞の意味と完全に同じ意味となるわけではありませんが、多くの場合、「似たような意味」として使うことができます。

(1)「will」の変換

「will」は、主に「単純未来」や「意志未来」の意を表す助動詞ですが、これと似たような意味として、**「be 動詞＋ going to」**という形に変換することができます。「be 動詞」の部分は、普通の be 動詞と同じように扱われます。

（★「『未来』の表現 1」→ P. 484 参照。）

例：It **will** rain tonight.　→　It **is going to** rain tonight.
「今夜、雨が降るだろう。」

(2)「can」「could」の変換

「can」と**「could」**は、主に「可能」や「能力」の意を表す助動詞ですが、これと似たような意味として、**「be 動詞＋ able to」**という形に変換することができます。「be 動詞」の部分は、普通の be 動詞と同じように扱われます。

（★「『可能・能力』の表現 1」→ P. 489 参照。）

例：She **could not** eat it all.　→　She **was not able to** eat it all.
「彼女はそれを全て食べることができなかった。」

(3)「must」の変換

「must」は、主に「必要」や「義務」の意を表す助動詞ですが、これと似たような意味として、**「have to」**という形に変換することができます。「have」の部分は、一般動詞として扱われますので、「三単現」の条件が揃っていれば「has」となり、また「過去形」ならば「had」となります。

（★「三単現」→ P. 93 参照。）
（★「『必要・義務』の表現 1」→ P. 491 参照。）

例：We **must** leave this town.　→　We **have to** leave this town.
「私達はこの街を去らなくてはならない。」

(4) 2 つの助動詞の意味を表現したい場合

2 つの助動詞を並べ、両方の意味を表したい場合には、片方の助動詞を「be 動詞か一般動詞を使った表現」に置き換えなくてはなりません。これは、「助動詞の後ろには動詞の原形のみが置かれる」という原則のためであり、「助動詞の後ろに助動詞を置く」ことができないからです。変換の際は、日本語で考えて「後ろに置かれる方の助動詞」をその

（※「世界につながる英文法」サンプル・Copyright： 株式会社デュープラー）

第２節　代表的な助動詞

1. 助動詞「will」の用法

「**will**」は、動詞に**「未来」**の意を加える助動詞です。「現在から見て、何らかの動作が、未来の１時点に行われる」ということを述べる場合に「will」が使われます。なお、「現在から見た未来」ではなく、「過去の１時点から見た未来」の意を表す場合には「will」ではなく、「will」の過去形の「would」が使われます。

（★「助動詞『would』の用法」→P. 224 参照。）

「文の発信者」が、「自分の意志」を含まずに未来のことを述べる表現を「**単純未来**」と言い、「自分の意志」を含んで未来のことを述べる表現を「**意志未来**」と言います。「will」は「単純未来」と「意志未来」の両方の意を表すことができます。

(1) 助動詞「will」1：「～するだろう」（「現在から見た単純未来」の意）

「単純未来」の意を表す「will」は、未来に対する**「予言」**や**「予想」**や**「予測」**や**「予報」**などを表し、**「～するだろう」**のような日本語で表されます。この意の「will」は「推量」の意を表しているとも言えます。

（★「『未来』の表現 1」→P. 484 参照。）
（★「『推量』の表現 1」→P. 497 参照。）

例：You **will** get lost without a map.
「地図がなければあなたは道に迷うだろう。」
（「単純未来」の表現。これから先のことに対する「予測」を述べている。）

(2) 助動詞「will」2：「～しよう」「（では）～します」（「現在から見た意志未来」の意）

「意志未来」の意を表す「will」は、自分がこれから行う動作について、人への**「宣言」**や**「予告」**として**「～しよう」**と述べる場合、あるいは人からの「質問」や「提案」や「命令」に対する**「返答（意思表示）」**として**「（では）～します」**と述べる場合に使われます。この意の「will」が使われた肯定文では、たいてい主語は「一人称（I か we）」となります。

（★「『未来』の表現 1」→P. 484 参照。）

例 1：I **will** be back in a minute.
「私はすぐに戻って来よう。」
（「意志未来」の表現。これから先のことに対する「宣言・予告」を表している。）

例 2：Lock the door after I go. ／ Okay, I **will**.
「僕が行った後でドアをロックしなよ。／わかった、そうする。」
（「意志未来」の表現。提案に対する「返答（意思表示）」として使われている。）

また「will not（= won't）」という否定の形ではどの人称の主語でも使われ、**「～しようとしない」**の意となります。

（※「世界につながる英文法」サンプル・Copyright： 株式会社デュープラー）